

交換留学決定後から出発までの学生支援に関する考察

名古屋大学 国際教育交流センター海外留学部門

岩 城 奈 巳

要旨

グローバル化に対応できる能力を持つ学生を育てるため、大学は国や民間の支援を受けながら学生に留学を後押ししており、その成果も少しずつ現れてきている。一方で、留学が決定した学生への渡航前支援については個々の大学に委ねられている部分が多く、十分指導が行き届かないまま準備不足で渡航する学生も存在するため、渡航後に現地での講義や生活への適応に時間を要し、留学直後は時間を有効に利用できないケースも多々存在する。本稿では、これまで見過ごされがちであった交換留学が決定した学生の留学準備期間に焦点を当て、渡航前の学生を対象に留学前の準備期間についてのインタビューを実施し、インタビューを通して見えてきた留学準備期間中の学生のニーズ、そしてこれからの学生支援のあり方について考察する。

キーワード

交換留学、留学支援、留学準備期間

目次

1. 国内の動向と本学の留学希望者への支援体制
2. 交換留学候補生へのインタビュー結果と考察
3. 今後の課題

1. 国内の動向と本学の留学希望者への支援体制

世界で活躍できる人材の育成が急務と言われる中、それに対応するため政府は2020年までに日本人海外留学生数を現状の6万人から倍の12万人にまで数を伸ばすことを掲げ（「日本再興戦略（2013）」）、官民両面から学生への支援に乗り出している。以前は日本人が留

学しないという声も聞かれ、留学を躊躇する学生の大部分を占める理由が就職の遅れ（留年）及び経済面であったが（「若者の海外留学を取り巻く現状について」2014年文部科学省）近年は留学経験を重視している企業が増え、留学による卒業の遅れは不利にはならず、むしろ経験が有利に働くという結果もある（「新卒採用に関するアンケート」日本経団連）。大学も学生の留学を後押しする「グローバル人材育成推進事業」、「スーパーグローバル大学等事業」など、政府主導による国際化推進事業の支援を受け、専任教員の配置や語学支援コースなどの設置を進めており、さらに官民協働の「トビタテ留学 JAPAN」を筆頭に留学希望者への奨学金制度による支援も開始された。その結果、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が発表した日本国内の大学とその協定校との学生交流に関する協定等に基づいた派遣数の調査（「平成26年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」2016年3月31日付発表）では、平成26年度の日本人留学生数は52,132人で、前年度の45,082人より7,050人増加しており、大学主導による留学生数は伸びている。語学試験対策から渡航先や志望校の選び方に関するアドバイスなど、留学促進に関する後押しが様々な大学において多く行われている中（田中、高濱 2011; 山川, 2016）、名古屋大学においても入学時に実施される新入生全員を対象としたガイダンスでの留学についての説明を始め、著者が所属する国際教育交流センター海外留学部門が運営する海外留学室にて、学期中は毎週留学入門セミナーを実施し、短期研修及び交換留学についての説明会、さらに留学に関するワークショップ等を定期的に開催し、留学について考える場を提供している。留学に必要な語学支援や準備についても、週末や長期休暇を利用した「留学準備講座」開講し、多くの学生の参加がみられた。専任教員が対応する個別相談件数も毎年1000件を超えており、留学を希望する学生への支援は整備されている。このように、名古屋大学をはじめ、国内全体で留

学させるための支援が広がる一方、留学、特に交換留学のような長期留学が決まった学生に対して大学はどのような支援を実践しているのか。交換留学とは原則1学年間又は1学期間、所属大学と協定を締結している大学に通い、現地の学生とともに自身の専門を学ぶことが基本であるため、交換留学の合格は1つの通過点に過ぎず、実際に渡航するまでの8ヶ月間に（例：翌年度8月以降の留学の場合、前年度の11月に留学は決定している）更なる語学力向上は当然のこと、自身の専門に関する準備が必要になる。名古屋大学では、渡航が決定した学生に対してワークショップやオリエンテーション等を通して準備支援を実施しているが、渡航直後の学生を対象に現地での様子を聞くアンケートを実施したところ、「留学前の8ヶ月間でもっとできたことがあった」、「(留学決定後も)英語を継続して勉強しておくべきだった」、「日本の情勢について説明できるようにしておくべきだった」など、渡航前にできたこと、するべきことがあった、などと感じた学生が多かったことが明らかになっている（岩城、2013）。本稿では、交換留学が決まり、渡航直前の学生を対象に実施したインタビューの結果を基に、交換留学決定後から渡航までの準備期間、大学ができる支援や教育的指導の可能性について考察する。

2. 交換留学候補生へのインタビュー結果と考察

交換留学が決めた学部学生を対象に、調査の目的、用途について説明し、協力の同意を得た19名（男子学生9名、女子学生10名）を対象にインタビューを実施した。学生への質問は以下の通りである。

Q1: 交換留学学内選考に合格してから派遣大学先に渡航するまでについて、語学面で一番苦勞したこと、していることは何ですか。その理由を教えてください。また、それをどう乗り越えましたか、又は乗り越えようとしていますか。

Q2: 交換留学学内選考に合格してから派遣大学先に渡航するまでについて、手続きなどで一番苦勞したこと、していることは何ですか。その理由を教えてください。また、それをどう乗り越えましたか、又は乗り越えようとしていますか。

なお、今回のインタビューは、大学院生、母国語が日本語ではない学生、海外経験がすでにある帰国生は含まず、日本国内で教育を受けた学部学生のみとした（学

生の学年、専攻、渡航先は表1を参照)。また、非英語圏に派遣される学生を含むすべての学生が現地にて英語で提供されているそれぞれの専門に関連した授業を履修する。

表1

渡航先	人数	学年	人数	学部	人数
アメリカ	4	2年生	10	医学部	2
イギリス	1	3年生	8	教育学部	1
イタリア	1	4年生	1	経済学部	8
オーストラリア	7			工学部	2
タイ	1			情報文化学部	2
デンマーク	1			農学部	1
ドイツ	3			文学部	3
ノルウェー	1				

2.1 インタビュー Q1 回答（19名のインタビューより抜粋、原文ママ）

Q1: 交換留学学内選考に合格してから派遣大学先に渡航するまでについて、語学面（英語）で一番苦勞したこと、していることは何ですか。その理由を教えてください。また、それをどう乗り越えましたか、又は乗り越えようとしていますか。

・ 後期に英語で受講する授業を取って見て、しゃべる機会が設けられていたのですが、①自分の言いたいことってというのが、すぐに出てこないっていう大きな問題におち当たって、そこで落ち込んでしまいました。自分の状況をちゃんとすぐに英語で伝えるという点が、一番苦勞している点です。その状況をどうしようと、悩んでいたときに、④使う機会を増やさなければと思ったのでチューターをして留学生の子としゃべる、帰国子女の友達もいるのでその子たちに頼んで、英語でしゃべるようにしたり、メッセージのやり取りを英語でしたりする機会を増やすようにしました。まだ乗り越えてはいないので、今、頑張っている最中です。

・ 私は③留学先が決まって、そういう試験勉強ということは、あまりしなくなりました。時々同じような問題集を開けてやってみてはいるのですが、①使わないと下がってきってしまうと思って、なるべく④ドラマを見たり、ネットで配信されているドラマを見たり、あとは、洋書を読んだりもしています。

①しゃべる能力を一定で保つ機会があまりないので、それをどうしようかと思っています。今、実行しているのが、自分が友達とかほかの人と会話したあとに、心の中で、今、その言葉を英語で言うのだったら、どうすればいいのか、④相手に対して口では日本語で言って、心の中では英語で言うような練習をしています。ただ、それがどういう効果が出るのかはまだわかっていないです。

・ 渡航してからうまくできるのか、という不安は、例えば①授業中英語を使ったり、日常的に英語を使ったりするときにふしぶしに感じて。それで何かをやらなくては、という①③焦燥感はあったのですが、あまり具体的にそのプランが練れなくて、もどかしさを感じていたところです。④G30¹の授業で日本人1人の環境で受けたりはしました。

・ 後期に専門が英語で開講している授業があったので取っていたのですが、②専門を全部英語で聞いて、試験で専門の知識を英語で書くっていうことを実際に試してみても、やはり専門だと難しい、一般的な単語に比べて難しいところもあって、ちょっと専門的な自分の専門に関する英語の知識、単語力が要るなとつくづく感じました。

・ 自分で英語に日頃ふれるようにはしているのですが、③それに対するゴールがなくて、何を目標にすればいいのかっていうところで、ちょっと立ち止まってしまう部分が多いところが、苦労ではないですけどちょっと思っているところですね。でもそれに対して自分の中でゴールがないのだったら④徹底的にやるしかないし、もしあまりやれていなくて、もし現地で痛い目を見ても、逆にその痛い目見て、成長できるかなって、突き詰めて考えすぎないようにしています。

・ 留学が決まって、いざ留学行くなってなったときに、今までやってきたのはテストで点を取るための英語だったので、実際行ったら何が必要かなって考えて、授業と人間関係みたいなところが大事だなと思ったので、④今、G30の授業1個取って、それでちょっと英語の授業に慣れようとしています。あとは④留学生と話したりして実際に人としゃべる英語を強化したりとか、英語のドラマ見たりして実際のスピードの英語を聞いたりしています。

・ 交換留学が決まって、③ほっとしているところもあって、一つはモチベーションが下がってしまっているというのがあります。特別セミナーのプレゼンテーションの授業を取っているのですが、①人前で英語のプレゼンをする授業で、私はもともと人前でしゃべるのも得意ではないし、あとそれをまたさらに英語でやるっていうのにも、苦労しているところで

す。
・ 一番苦労しているのが、本当情けないのですが、①英語に接する機会が少なくなっているってことで。もちろん専門科目が本格的になってきて実験があることが言い訳になっちゃうのですが、何とかして時間を作ろうと頑張っています。

・ 今学部の勉強が忙しくて、英語の授業はもちろんもうないので、かといって取れる時間を確保できるわけでもないの、自分でやってかなきゃいけないのですが、そこが今なかなか、①②やらなきゃと思いつつ、ちょっとやりきれないところが正直なので、さすがに今どうにかしなきゃと思っているところです。

・ 後期にG30授業を取ることにして、留学生10人ぐらいと日本人は私1人で、その授業を履修しました。②日本文学の授業で毎回課題の英語が20ページとか、もう多いときは何十ページも出て、それが読めていなくて苦戦しています。今は①②日本語で読んで内容を理解して、授業に参加しているという状況なので、留学先ではそういうわけにはいかないの、少し不安です。その授業はディスカッション形式なので、②最初はそのディスカッションに入っていけなくて、本当に留学とか海外の大学で学ぶことは向いてないかも、と思ったのですが、やっと④次の授業からは一言言おうとか、そういうふうに自分の中で目標を設定して、少しずつですが発言するようにしています。ほかの国から来ている留学生は、すごく英語力が高くて、今圧倒されている状況なので、まだ発言とかも、課題をこなす能力とかについては苦戦している状況で。これだと海外の大学ではもう単位が出ないぐらいかなと思って、そんなふうだったら④留学に参加する意味もないので、一言、少し言うようにしています。

インタビューから最初に汲み取ることが出来るのは、学生はそれぞれ協定校が指定する語学力はクリア

¹ G30とは英語のみによる授業で学位が取得できる教育プログラムを指す。

しているものの、英語で授業を履修するという点、さらに言うと、英語そのものに対して何らかの形で不安を抱えている点がある、ということである。そこから見えてきたそれらの理由を、①話すこと、②専門知識や授業に対する不安、③モチベーションの維持、と分類し、④は、①から③をどのように工夫し乗り越えたか、もしくは乗り越えようとしているか、とした。まず、どの学生にも共通していたのが、①の、話すこと、英語を使うことに対しての不安である。「自分の言いたいことがすぐに出てこない」、「話す能力を一定で保つ機会がない」など渡航後自身が置かれる英語環境に対して準備不足と感じ、焦っている様子が見受けられた。それらに対しての策としては、「使う機会を増やすようところがけた」、「ドラマなどを英語字幕付き見るようにした」、など、自ら英語に触れる機会を増やすよう努力していることがわかる。次に、交換留学では自身の専門を学びに行くため、②のように、英語での講義についていくことができるのか懸念する声が聞かれた。こちらは、多くの学生が学内で英語にて開講されている授業に出ることで英語の環境、講義スタイルや課題への対応に慣れる努力をしているようであった。交換留学決定後の英語及び留学に対するモチベーションの維持に関する③は、先にも述べたように、交換留学は選考から実際の渡航まで8ヶ月ほど間が空くため、「焦燥感はあるけれど具体的にプランを立てられない」、「勉強（語学の）をしなくなってしまった」、「目指すものが無くなりモチベーションが下がり気味になっている」など、準備期間どのように留学のモチベーション維持させていくのか課題になっていることが見えてくる。モチベーション維持に関しては具体的な解決策はあげられておらず、なんとなく過ごしてしまった、という学生が多くを占めるため、この部分をどのように海外留学部門として指導できるのか、課題だと感じる。

2.2 インタビュー Q2 回答 (19名のインタビューより抜粋、原文ママ)

Q2: 交換留学学内選考に合格してから派遣大学先に渡航するまでについて、手続きなどで一番苦労したこと、していることは何ですか。その理由を教えてください。また、それをどう乗り越えましたか、又は乗り越えようとしていますか。

・ 派遣大学に渡航するまでの手続きで大変だなと思ったのが、①寮への手続きです。大学とオンキャンパスの寮がかなり独立したかたちを保っているので、大学への手続きと寮への手続きもしなくてはならず、大変でした。初めて③海外で長期にわたって住むというのは、今までに一度もないので、どういう状況なのか、そのための準備も、何をそろえていいのか調べなきゃいけないだったので、④交換留学を経験された部活の先輩にアドバイスをいただいたり、海外の大学に行っていましたという方にもお話を聞いたり、どういう準備をすればいいのか、④書類を早く片づけるにはどうすればいいかとかアドバイスをいただきながら、準備をしました。

・ ②派遣先大学に応募する書類を提出するのが一番苦労したかなと思います。なぜかという、英語で長い文章が書いてあり、英語で記入したことがないので、それを一回一回、ネットでどのように住所を書いたらいいのとか調べました。私の大学の場合は、ネットで応募したあとに、メールが返ってきて、その書類を読んで、書いてまた送信するっていう2回の送信のタイミングがあったのですが、それが最初は③どういう状況なのか全くわからなくて、なので④先生たちに逐一質問して、お答えをいただくっていうようなかたちを取りました。先生方の協力のもと、その苦労を乗り越えたと思います。

・ ②VISAの申請がもちろん全部英語なので、全部それを読まなきゃいけないっていうのもあったのですが、苦労しました。でもほかの④先輩方にもいろいろ聞いて、助けてもらいました。

・ 手続き自体は、実際英語でじっくり読んで、メールも電話と違ってじっくり書けるのであまり苦労はしなかったのですが、③ちゃんとできているのかなっていう不安が一番でした。留学いけなくなったらいやなので、くだらない手続きミスとかで。③本当ずっと気が張っていた状態でした。

・ 大学への手続きの一環で一番苦労したのは①寮のアプリケーションです。何か自分のことについて書くっていうのがあって、自分が今までやってきた芸術活動、スポーツ、パーソナリティとか、あなたがこの寮に入ったら寮にどんないいことがありますか、とか、そういう内容のちょっとしたエッセイを書くみたいなやつだったのですが、③今まで自分のことを日本語ですらそんなふうに表現する機会もあまりなかった

し、自分を売り込む、みたいのをやったことがなかったの、何を書けばいいのかっていうところで、まず一番苦労しました。さらにそれを英語に直さなければいけなかったの、それも大変でした。④とにかく時間がかかってもいいから、毎日その文章と向き合っ、何を書こうかっていうのもひねり出して、こつこつ少しずつ毎日書き上げていったことで、何とかアプリケーションを完成させることができました。

・ ①寮の手続きで苦戦しました。寮のアプリケーションをしても、しばらくたっても何の連絡もこなくて、催促のメールも二度ぐらい送ったのですが、それもこなかったの、④先生に相談して、電話するってことで電話して、解決しました。

・ ②大学に提出する書類の履修希望は前期と後期で選びなさい、ときたのですが、自分が選びたい科目を選ぼうとすると、時間がかぶってしまっていて、その中でも、かぶっていてもそのまま自分の受けたい順に出すか、それともどちらかが受けられなくなるのなら、ほかの時間で選んでいくかっていうのを考えました。最終的には、④希望を出す時点から、自分の受けたいものを時間がかぶらないように希望を提出しました。

・ 一番苦労したのは②大学のホームページ、英語なのでやっぱりいつも見ている日本語とは慣れないので、それを一つ一つ読んでやってくってのがすごく大変でした。そういうときに一応、向こうのアドバイザーの人にも聞くのですが、③その前に一応その大学に留学していた人に聞いたりして何とか、まあもちろん最初は自分で一応読み解くのですが、できなかつたらいろんな人に聞いてってかたちで何とかしています。

・ ③唯一思ったのは、ちゃんと自分がアプライできたのかっていう、確認のメールとかは何もなくて、自動送信とかがなくて、本当にできていたのかわからない。オンライン上でやったはいいいけどそれが果たしてちゃんとできていたのか、自動送信のシステムとかがなくて、③ちょっとそれが不安でした。けど、ちゃんとできていてちゃんときたのでよかったですけど。

・ ②アプリケーションフォームが出るのがすごく遅くて。あがってからも、それでリンクを開いても、Not found とか開けないみたいなのが時々出ていて、まずそもそもアプライする段階までいけないっていう時期が長くて、結局実際に出願に、③本格的に出願の行動

を始められたのが5月入ってからになっていて、そこでまだ大丈夫なのかなという不安がありました。最終的にはちゃんと出願できたので、そこは一応乗り越えることはできました。

・ 寮の申し込みとかするとき、①実際どこの寮がいいのかなとか、ミールクーポンとかご飯がついてるところがいいのか、ついてないほうがいいのかとか、そういうのが全然わからなくて、少し困りはしました。けど、④今行っている子に友達を通じてちょっと連絡を取らせてもらって、その子から少しアドバイスをもらいました。

・ ②自分の取りたい専門科目には大体事前必修がついていて、まずその許可を取るのに各教授にメールで、この授業取ってもいいですかっていうのを聞くのに苦労しました。もう③直接取りたかった講義の教授のところへ直接メールを送って、で、いつ自分が誰にメールを送ったのかを、メモとか取って把握しておいて、返信きたらすぐ返してってやっていたら、例えば経済学の授業だと、経済学の学部長みたいな人が僕のスケジュールいじってくれまして、それで何とかになりました。

・ ②派遣先の大学が交換留学生の出願のシステムを今年から変えていて、それが出るのが遅かったの、それで何を準備すればいいかも結構ざりざりまでわからなかったの、去年までのものを参考にして準備していたのですが、何かほかの大学だともう受け入れの許可とかも出ているところもあるみたいで、③ちょっと焦りはありました。

留学決定後から出発までの手続きに関する苦労は、①寮への申請、②協定校への申請、③精神的な不安と、こちらも大きく3つに分けられ、Q1同様、④をそれぞれの解決策とした。留学の手続きは協定校によって異なるためそれぞれ担当教員が個別に対応して準備を進めており、どの学生も何らかの苦労はするものの、最終的に無事終了するため、問題点を今まで強く意識されてこなかった。しかし、改めてインタビューを実施したことで、困っている点が多くの場合共通しているのかということが見えてきた。まず、①寮について、希望する寮とやりとりを個別に行わなくてはいけない場合、相手からの返事が来ない、希望が通らない、など相談を受けるが、今回のインタビューを実施

した学生たちにも先方とのやりとりで苦労があったことが伺えた。また、「海外で長期にわたって住むというのは、今までに一度もないので、どういう状況なのか」とあるように、海外で暮らすことはもちろん、一人暮らしもはじめての学生が多いので、メンタル面も含め、しっかりと指導する必要があると感じた。次に、②協定校への申請に関しては、手続きを進める上で英語を正しく読むことが出来ているのか（理解できているのか）、ということ、記入方法の戸惑い（住所や電話番号など）、希望する履修科目登録についてなど、多岐に渡っていることがわかった。特に、申請をオンラインで実施する際、正しく入力できているのか、確認方法で戸惑っていることが伺える。さらに、大学が紙媒体での申請からオンライン申請に切り替えた年にあたり、受け入れ側もまだ不慣れなため、現地の担当者によって言うことが異なる、オンライン上で情報が正確に反映されていない、ということも多く、そこでも学生は苦労することがある。また、英語圏の大学はウェブサイトが比較的しっかりしているものが多いが、非英語圏の英語サイトは情報が古かったり、リンク切れをしていたりする場合もある。③のように、留学に向けて準備を進めていくにあたり、「間違えて進めていないか」という不安は多かれ少なかれの学生もすべてが完了するまで抱えていることも見えてきた。これら①から③の解決方法として挙げられていたのが、ほぼ全員が共通して、留学経験者の先輩に聞く、海外留学室の教員に相談する、であった。Q1のように、それぞれ個々のアプローチや解決方法があったのと異なり、どの学生も事情を知っている人に相談することで解決していたようである。

3. 今後の課題

今回の調査で、留学を希望する学生は、留学を決意してから合格するまでの支援も必要であるが、留学決定後から渡航までの間もさまざまな困難や悩みがあり、それに対する教育的指導や助言などが必要であるということが見えてきた。まず、英語や現地での授業に関する渡航前までの悩みへの解決策として、学生に英語に触れることができる場を提供することが一番に挙げられる。今回のインタビューでも、英語で行われる専門の講義に参加したり、留学生との交流を積極的にしたりする学生もいたが、全員が自ら動いているわ

けではなく、何かしなくてはいけないが、何をしても良からず立ち止まっているような学生も多くいることがわかった。現地に行く前から少しでも英語の環境に慣れるため、渡航前に英語で開講されている専門講義の紹介、学習方法のアドバイス、さらに、その環境を提供することも望ましいと考える。海外留学部門では、交換留学の渡航2ヶ月前に学生を召集し、留学先で必要なアカデミックスキルズとして、数日間に渡りノートテイキングやディスカッションへの参加の練習をすると提供しており、一定の成果は上げてきたが、今後は更に工夫し、それらを定期的に開催するなどしていくことで、学生の渡航前の不安や懸念を今よりも払拭できるのではないかと考える。次に、モチベーションの維持である。留学決定までは熱心に語学勉強に取り組み、希望する大学について調べていたものの、一旦留学が決まると渡航まで8ヶ月間ほど空くこともあり、気持ちの維持に苦労している学生も多く存在することがわかった。留学予定の協定校からすでに名古屋大学に受け入れている留学中の交換留学生在席している場合は、その学生と面識をえて、色々な情報を得ること、国際教育交流センター開催されているさまざまな国際交流の場利用し、それらの活動に積極的に参加すること、定期的に派遣先のウェブサイト等を見ることなどを提案してきたが、今後も、学生からの意見を取り入れながら彼らのモチベーションを維持する方法を検討していきたい。また、Q2の回答から見えてきたように、学生は困ったことは教員や留学経験者に相談し、解決していることがわかった。現時点で学生が頼るのは、寮や書類などの事務手続きに関することが中心であるが、留学決定後から渡航前までの間にできる英語学習、モチベーションの維持や事前に準備しておくべきだったことなども、留学経験者から渡航前の学生に伝えることで準備期間の留学への取り組み方も変わってくるのではないかと考える。留学を支援する筆者は、学生に対し、不安を抱えているのは自分だけではないこと伝え、学年、学科を超えた横の繋がり構築をしながらお互い助け合う環境を作り、さまざまなことを共有する場をより提供していきたい。準備期間をどのように工夫して過ごすかで、現地での充実度が変わってくることを理解させ、準備期間の8ヶ月を乗り切ってほしいと考える。

*本稿は、2016年2月及び6月に交換留学派遣候補生を対象に村山かなえ特任助教と共に実施したインタ

ビューデータの一部を抜粋したものである。

参考文献

- 岩城奈巳(2014)「渡航前, 渡航中, 渡航後の振り返りから考える交換留学に対する意識調査」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』創刊号, p. 27-32.
- 田中共子, 高濱愛(2011)「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャルスキル学習: アサーションを課題とした上級セッションの記録」岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第10号, p. 103-118.
- 日本学生支援機構(2016)「平成26年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」, <www.jasso.go.jp/about/statistics/.../2016/.../short_term14.pdf>

- 日本経団連(2016)「2016年度新卒採用に関するアンケート調査結果」, <https://www.keidanren.or.jp/policy/2016/108_kekka.pdf>
- 日本再興戦略(2013) <www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf>
- 文部科学省(2014)「若者の海外留学を取り巻く現状について」, <www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/dai2/sankou2.pdf>
- 山川健一(2016)「留学支援としての英語による大学の授業—留学前と留学後の役割に焦点を当てて—」ウェブマガジン『留学交流』11月号.